





The Souvenir

1924

K. H. C. S.

内 容

序 文	1
題 字	2
College Songs	3
校 長	5
學 園	6
研 學	17
學友會	35
事 務	50
丘のまころごころ	55
丘人のつごひ	66
追 憶	75
商大問題	80
祝ひの筵	87
回 想	99
丘 人	114
先 生	115
Our Friends	140
商大と京大との友	206
故 人	220
附 録	224
學校沿革略	224
學校配置圖	225
職員名簿	226
學生氏名索引	229

序の言

清明の丘をめぐりて世潮のみなれ天行の曉をやみふくまう。世ののりふくまことあやう過渡の
 相あるのみ。おれらはこの世に生をきり時代を感ずることとやふ。顧へば同慶四年の生は
 あつたれ過渡の世に。まゝ見ぬは生を惜みは初て宿構の苦思に終る。これと大要の要請
 と謂い自由にて身勢なる同精神と叫ぶ。凡ては新しき価値創造の過程なり。
 今やわれ時の巨命を蒙りて丘離り新しき途に上る。運命は寂しき柳園如常果のふらひ。登高の
 悲願と別離の哀愁とまゝ裏に開いて行途をうら悲壯なり。さはれ見よ望み果てふく
 新生の春は萬象ふて支輝ける。さらば行の心。あやふ、新しき力も新しき旅にまて
 啓法の地を垂あて進みくはまこと師父のまゝに帰る所にはある。

植
 坪
 三

恭
信
勤
敏
非
業
何
產



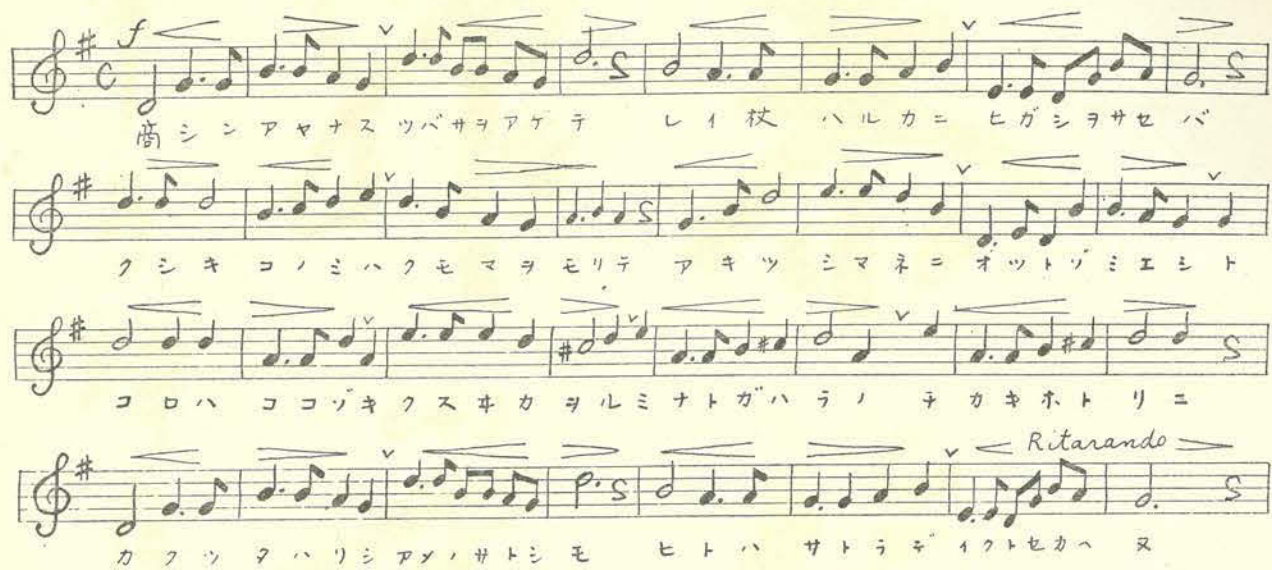
甲子
端月
五
友
庵
題



恭
信
勤
敏
非
業
何
產

恭
信
勤
敏
非
業
何
產

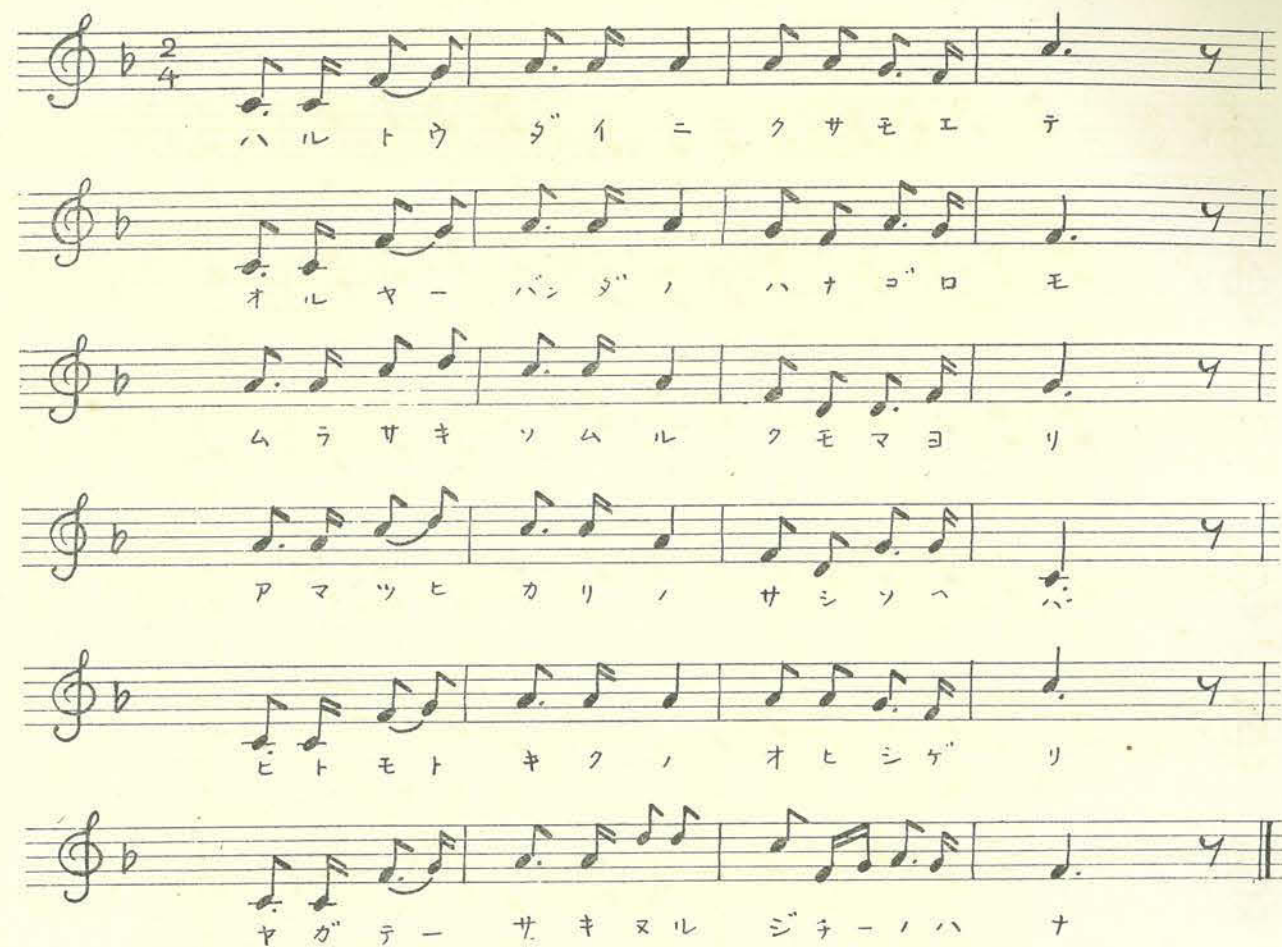
商 神



商 神

- (一) 商神彩なす翅をあけて、靈杖遙に東を指せば、靈しき果實は雲間を漏りて、秋津島根に落つぞ見えし、所はこゝぞ菊水かなる、湊河原の近きはさらに、かく傳はりし天のささしも、人はささらで幾年か経ぬ。
- (二) 神の吹息のこもりて成りし、靈果いかに地に朽つべき、豊榮昇る朝日のかげに、八洲の外の潮風吹きて、いつし催す氣運に乗じ、わが學校で世に生れたる、眠る商界夢さますべき、使命は天の授けし所。
- (三) 此所摩耶の山六甲の峰、連り亘る山ぶさころに、數の若鷹はぐくまれ居て、靜にうかぶ雲の行かひ、朝妙なる琴のひびきは、敏馬の濱に松を吹く風、夕やさしき舞の姿は、茅渚の浦曲に白帆行く影。
- (四) 希望に満てる春の潮の、寄せてはかへず清き渚や、熱誠もゆる夏の盛を、いたはる風の葦合の里、須磨や明石をかけて照る、月には物のあわれなぞ知る、冬は凜たる後の風、奔馬空行く勢示す。
- (五) 夫れ山水の秀靈の氣は、偉人傑士を起たしむさや、天の使命を胸に收めて、清き自然に抱かれながら、筋骨鍛へ智徳を研く、切嵯琢磨の四年の春秋、養ひ得たる鬱勃の意氣、抱負を語れや千餘のなごこ。
- (六) 金甌無缺の三千餘年、かがやく光は劍の響、心はおなじ大和男子の、我等は牙齦を執つて起さむ、日出づる旗を高くかざして、日入らぬ國を手に携へて、目ざす平和の戦の場に、匂ふ御國の花ぞ咲かせむ。
- (七) 雄飛の時ぞと増離れて、野に立出づる蒼鷹幾羽、爪も研ぎの力も足りぬ、尋にも餘る翅を張れば、枝の百鳥皆惜れ伏す、扶搖萬里の風を起して、おのが向々東に西に、雲に突き入る勢見よや。
- (八) あゝ芳はしき櫻の國の、咲くや此花難波津近く、帆船黒船出入しけき、神戸は我等の北溟なるぞ、鵬翼圖南の時至る迄、いざや靜に學び修めて、祖國の榮を我等祈らむ、我等の榮を神に祈らむ。

寮 歌



寮 歌

(一) 春筒臺に草萌はて 織るや萬葉の花衣 紫染むる雲間より
天つ光のさし添へば 一本菊の生ひ茂り やがて咲きぬる自治の華

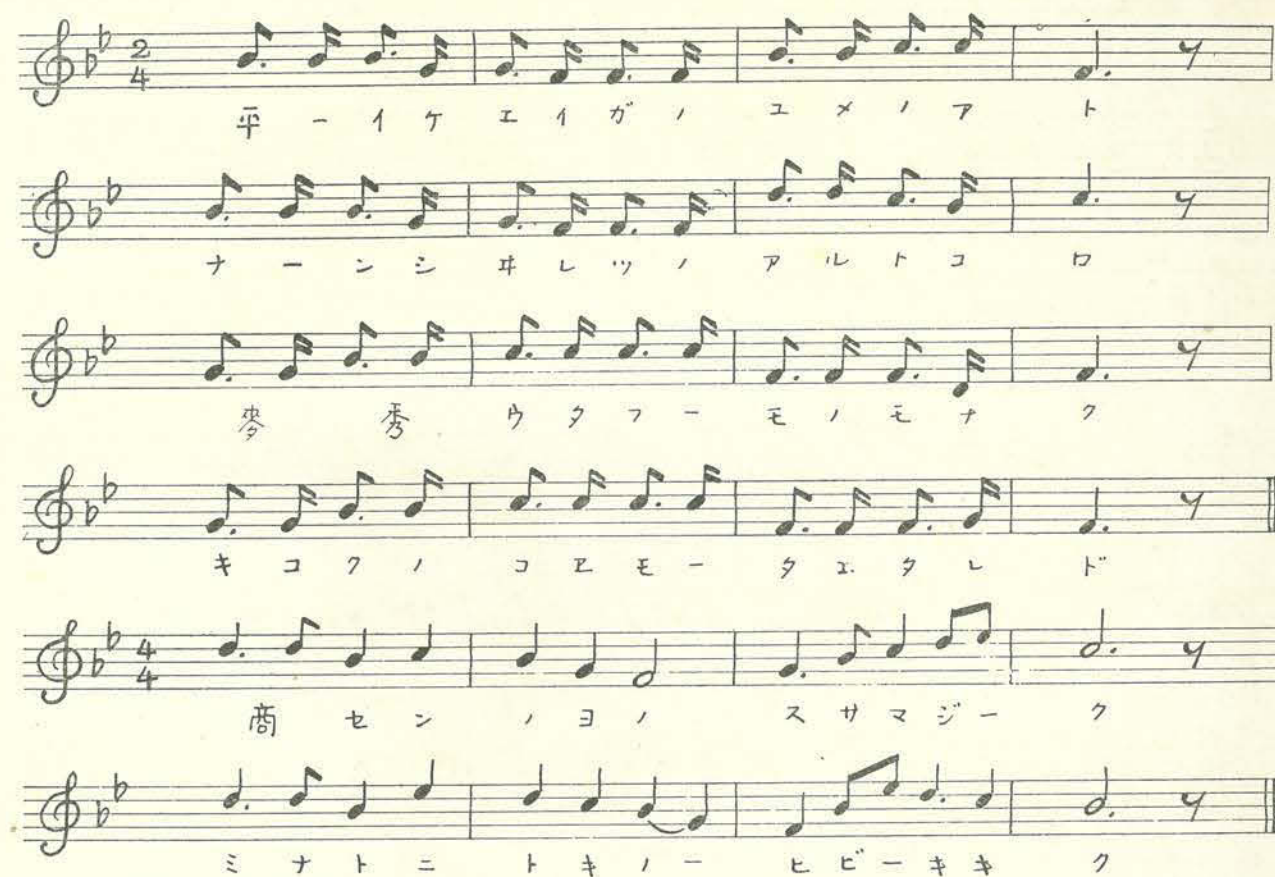
(二) 見よ曉の明星の 下界の眠深き時 永劫不滅の光もて
告ぐる啓示を君知るや 立てよ吾友自治の華 理想の岸に咲かせなん

(三) 佛母山下の逍遙に 仰ぎて思ふ師の教訓 茅渚の浦飛ぶ白雲に
問はば故郷の父母如何に 今螢雪の青年が 伏す龍池の四春秋

(四) 夏曙の空の色 秋蕭條の雨の夕 二層の樓の欄干に
剛毅の士氣を鼓舞しつゝ 血は紅の若人が 期する經世の策や何

(五) 嗚呼徐に機熟し 大牙一度動く時 全寮只是一心の
百騎の前に何かある 菊の下行く溪水は 匂流さむ萬代に

大 施



大 施

一 (神戶) 平家榮華の夢の跡 楠氏遺烈の在る處 夢秀論ふ者も無く
鬼哭の聲も絶へたれど 商戦の世の凄まじく 港に呐喊の響聞く

二 (學校) 衛の東に、に見る 巍峨壯麗の二層樓 激瀾の波、脚に寄せ
嵐翠の山、脊に在り 世の嵐をば隔つれど 是ぞ健兒等苦闘の地

三 (世潮) 文明の風颯ひ來て 孤島桃李の夢破れ 俄に覺めし 諸人は
舉措を失して彷徨し 奢に流れずば情に逸し 奇に偏せずば粗に失す

四 (意氣) 浮薄の世潮低う見て 五百の健兒雄伏せり 瀛中の錐、末脱し
斬馬の劍、腰に鳴る 机上の空論何か有る 章句の末枝主義ならず

五 (機會) 啓示の光影清く 向上の駒嘶けり 怪風驚然起りなば
圖南の鵬翼は一搏 暗雲羅々漲れば 登天の飛龍只一躍

六 (目的) 男兒一たび立たん時 阿修羅の如くをたけびて 陸吹く風に海風に
大施翳し進みなむ 商戦場の只中に 高く凱歌を揚ぐるまで